
放課後心霊倶楽部

Z子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

放課後心霊倶楽部

【Nコード】

N50410

【作者名】

Z子

【あらすじ】

普通とは言えない彼らと普通を自負する少年とこの世の裏側の、現代なんちゃってFGなお話。ありがち・趣味炸裂注意。

1 コペルニクスの転回

時刻は十月の中旬、二十三時と少し過ぎ。

場所は僕が通う学園高等部の裏庭。まぶしいくらい丸い月が裏庭のタイルや彫像を照らしている。

そんな妙な場面設定で僕は、何をしているんだろう。

そんなことを思いながら茫然と尻餅をついたまま間抜け面をさらす僕に、「彼ら」はお互いの顔を見合わせた。

そして一斉に溜息を吐く。

やがて、ちょうど僕の前に立っていた彼女が困ったように笑いながら手を差し伸べた。

ぎくしゃくとその手を見て、彼女を見て手を取って立ち上がる。

この期に及んで、彼女のその触れた手の柔らかさと温もりに僕の心臓が跳ねた。慌てて顔を上げれば、視線が合う。頬が熱を持った。

僕は真正正銘の馬鹿野郎に違いない。うっかり今までの状況を忘れて僕の口が勝手に開いた。

「ええと、佐藤さん。こんな時間にどうしたの」

「え、」

彼女がぼかんと口を開く。そんな彼女、クラスメイトの佐藤美幸さんの顔を見て僕も自分が何を口走ってしまったのかに気付いた。

彼女も誰に言われてもそんなことを僕には言われなくなつただろう。

そしてそれ以上に、今見てしまったものを思い出し、佐藤さんの手を握つたまま凍り付いてしまった。

今見てしまったもの。

そろそろと佐藤さんの握っていない反対側の手を見る。

きらりと月の光を受けて光る、刃が出たままの状態の15センチほどの……カッターナイフ。

(……ええと、あれ?)

カッターナイフから視線をはがす。視線を再び佐藤さんに合わせれば、一連の動作をしつかり見ていたらしい佐藤さんと目があつた。相変わらずかわい。眼鏡の奥のくりくりした目とまさか見つめあう日が雇用とは思わなかつた……いやそんな場合じゃない。このドキドキを一体なんとすればいいのか。ほとんど同時にへらりと笑いあふ。

「え、ええと、そのカッター、どうしたの?」

「し、清水君、今の、見ちゃった?」

かみ合わない会話。沈黙。

どこかで、「ぶふっ」という吹き出す音が聞こえたような気がしたが気のせいかもしれない。僕は笑顔のまま(だと信じたい表情のまま)、佐藤さんの言葉を脳内で素早く十回繰り返した。そして、笑顔のまま曖昧に繰り返した。

「いま、のつていうと　佐藤さんが女の人を刺して女の人が消えてしまったような気がする白昼夢のこと、で、いいんでしょうか」

「あ、あの、」

手をつないで笑いあったまま、僕らは固まる。え、なにこの状況。僕は、この場合どうすればいいんだろう。

そう。

僕がさっき月明かりに見たのは、密かにときめいていた佐藤さん
と。

佐藤さんの前に立っていた長い茶髪をぼさぼさにした女の人と。

佐藤さんが振り上げたカッターの刃の輝きと女の人の頭に吸い込まれていく瞬間と。

……その女の人が、瞬きをする間に消えてしまったような景色だった。

あれ、なんだかこうして考えてみると僕が見たのって殺人現……
気のせいかな。顔は笑顔のまま、目はかわいい佐藤さんに釘付けで、
全力で現実逃避する僕の脳みそとは裏腹に、僕の体の他部位は現実に
適応していた。

握られていた手とは反対の手が制服のポケットを探り、愛用の携
帯電話に触れる。

それを取り出すより早く、

「はい、失礼しますね」

「へ、うえ!？」

ポケットに入れた手が急にあらぬ方向にひねられて、体がふわつ
と浮く。ぽかんと口をあけたままの佐藤さんの顔がぐるんと回転し、
気が付けば背中に衝撃を感じて息が詰まる。

「つか、は」

「申し訳ありません。ですが警察沙汰は少々困るものでして」

呼吸を吸えずに吐き出した僕のにじんだ視界に入ったのは、丸い大きな白い月と眼鏡をかけた優しいイケメンの顔。

「ナイス、アッキー」

「でかした晃！」

「あ、あのあんまり乱暴なことは……！」

「犬扱いはやめてください。しかし、宗太としのぶは何をしてるんです？」

佐藤さんをシカトするとは！ ひねられた腕は掴まれたまま、むせる僕は転がされるまま体を横にしてかかる体重の重みに呻いた。思わず情けなくも口から泣き言が零れてしまった。

「いつ、てえ……なにすんだよっ」

「いえ、すみませんが少々こちらに事情がありまして」

言葉遣いは酷く丁寧だ。しかしそれで大人しく転がっていられる人間がこの世に何人いるんだろう。けれど僕は大人しく口をつぐんだ。ようやくこの場にいるメンバーの顔が見えたからで、そしてそのメンバーにビビったからだった。

「知らないわよ。ったく、しかもよりによって“見える”奴なわけ？」

「てか、まだ生徒にいたってことにビツクリー」

僕の顔を覗き込んだ顔が二つ。アップに思わず身動きをしたら、肩に重みがました。ひどすぎる。

日頃、確実に縁がないきつめ顔の華やかな美人と、同じ男と思いたくない派手な顔立ちのちゃらそうなイケメン。何という偶然。今、僕の腕を捻っているらしい眼鏡のイケメンも含め、僕は全員顔を知っているその事実には動揺している。

「あのっ、本当にごめんなさい！」

「別にいいわよ。直前まで気付かなかったこっちの落ち度だわ」

震える佐藤さんの声にあっさりと返したきつめ美人こと、高等部生徒会長、東咲子。

「ちょっと待ってー俺ヒメタイムー」

ぴぴっというアラームに携帯をいじるチャライイケメンこと、ミスター学園三冠王、久保慶介。

「……この状況でもそれはさすがに感心します」

そして依然、僕の腕をひねっている眼鏡をかけたイケメンこと、高等部生徒会副会長、瓜生晃。

全員、名前の前に思わず肩書が一個付けられるほどの有名人。僕はいつたいどうすればいいのか。拭えない涙目のまま茫然と目の前で繰り広げられている世界を眺めているだけの僕の前から生徒会長が消える。佐藤さんがカッターを握ったまま何度もこちらに頭を下げている。明るすぎる月明かりの中で、眼鏡の奥の目が泣きそうにうるんでいるのだけが妙に現実感を持っていた。

急に、視界を遮る影に驚く。焦点を合わせようと瞬けば、すぐ近くで携帯を耳に当てたままこちらを見るミスターイケメンがにつこ

りと笑っていた。近くで見れば見るほどミスターイケメンに恥じない、本当にきれいな顔をしていた。ハーフらしいと噂が立つその彫の深い甘ったるい顔の奥の目の色が金色であることに気付いたのと同時に僕は息をのんだ。

その笑顔に背筋が震えたのはその垂れた目の奥がひどく冷ややかな色を秘めていたからだろうか。

「まあ、何はともあれようこそ、馬鹿げたこの世界の裏側へ
清水幸人くん」

時刻は十月の中旬、二十三時と少し過ぎ。

場所は僕が通う学園高等部の裏庭。まぶしいくらいの丸い月が裏庭のタイルや彫像を照らしている。

そんな今日という日も終わってしまうようなそんな中途半端な舞台設定。

格好つけて言えばその日が僕の人生におけるコペルニクスの転回であり　有り体に言えば転換点でもあったということだった。

1 コペルニクスの転回（後書き）

覚書

清水幸人 「僕」＝当話の主人公

佐藤美幸 清水幸人のクラスメイト

東咲子 生徒会長

久保慶介 学校の有名人

瓜生晃 生徒会副会長

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5041o/>

放課後心霊倶楽部

2010年10月25日04時00分発行